

家庭科教育における子守帯を用いたおんぶ指導の必要性

—大学生を対象としたおんぶ及びだっこに関するアンケート調査からの検討—

西川 愛子

愛知学泉大学 家政学部

The Need to Teaching Piggyback Using Auxiliary Equipment in Home Economics Education

—Based on a Survey of Way to Carrying an Infant on University Students—

Aiko Nishikawa

Aichi Gakusen University

キーワード：おんぶ piggyback、子育て child rearing、家庭科教育 home economics education

要約

子守帯を用いたおんぶを家庭科教育の体験的学習の教材として開発することを目的とし、ここでは、将来、子育て世代となるであろう大学生を対象におんぶ及びだっこに関する経験や考え方についてのアンケート調査から、その必要性について検討を行った。その結果、大学生には概ね自分自身がおんぶをしてもらった記憶があり、自分の子育てにもおんぶを取り入れたいと考えていることがわかった。その一方で、おんぶを目にする機会やおんぶをする機会は、だっこの場合に比べて多くなかった。また、おんぶをする機会があった者でもその相手として「実習中に関わった園児」が多く挙げられたことから、学校教育でその場を提供しなければおんぶをする機会はなかったことが示唆された。これらのことから、将来、子育てに取り組むであろう世代には子育てに直面する前に、子守帯を用いたおんぶができるよう家庭科教育の中で教える必要があると考えられた。

1. はじめに

(1) 目的

近年、少子高齢化や女性の就労の増加をうけて様々な子育て支援が行われるようになった。例えば、赤ちゃん訪問事業や産後ヘルプ事業、子育てサポート事業などの行政サービスがある。また、待機児童対策には高い関心が寄せられている。その一方で、授乳やおむつ替え、だっこやおんぶといった子育てに関わる生活行為ひとつひとつが注目されることは少ない。

従来、子育てに関わる生活行為は幼い頃から見聞きする、親世代から教わるなどによって伝えられてきたと思われるが、少子化や生活様式の変化によってそうした

場が少なくなつたと感じられる。その隙間は助産師や保健師、看護師等による育児指導によって補われていると考えられるが、十分な指導を受けることができないまま子育てをスタートせざるを得ないことも少なくないのが現状であろう。こうしたことから、将来の子育てを担う若者世代に対して、彼らが子育てに直面する前に、子育てに関わる「技」を身に付けられるよう支援していくことが必要であると考えられた。

そこで、本研究では子どもと接する機会が少なくてもイメージしやすい上に、子どもと接しながらも両手で他の家事ができるという利点を持つおんぶに注目し、子守帯を用いたおんぶを家庭科教育の体験的学習の教材として開発することを目的とした。ここでは、将来の子育て世代となる大学生を対象としたおんぶ及びだっこに関する経験などについてのアンケート調査から、その必要性について検討を行った。

(2) 高等学校学習指導要領における家庭科・保育領域の内容

高等学校学習指導要領の「各学科に共通する各教科『家庭』」には、現在、家庭基礎、家庭総合、生活デザインの3科目がある。いずれも保育領域に関する内容があり、「子どもを生み育てることの意義を考えさせる」¹⁾や「子どもの発達のために親や家族及び地域や社会の果たす役割について認識させる」¹⁾と記載されている。すなわち、子どもについて考えさせることが中心であり、子育ての技を習得させるものではない。また、「主として専門学科において開設される教科『家庭』」にも「子どもの発達と保育」、「子ども文化」の科目があるが、その内容の取扱いとして「実際に子どもと触れ合う学習ができるよう、幼稚園や保育所、認定こども園及び地域の子育て支援関連施設などとの連携を十分に図ること」²⁾と記載されている。子どもと「触れ合う」ことを念頭に置いて指導することが求められており、子育てに関わる生活行為を見せたり、その技を習得させたりするためのものではない。

2. 方法

(1) アンケート調査

1) 調査方法

アンケートは2014年10月～11月に、質問紙調査法の中の集合調査法(自記式)で行った。アンケートの実施手順は、調査前に、調査目的やプライバシーの保護等について口頭及び書面で説明を行った上で、同意が得られた者のみに実施した。調査に要した時間は約20分であった。

2) 調査対象者

対象者はA大学の2～3年生で、このうち115名から回答を得た。

3) 調査内容

主な調査内容は「幼い頃のおんぶに関する経験」についての項目、「過去1～2年におんぶを目にした経験」についての項目、「将来の子育てとおんぶに関する考え方」についての項目である。なお、比較のため、「だっこ」についても同様に調査

した。

また、おんぶをする際に用いる道具には「子守帯」、「おんぶ紐」、「おんぶ帯」、「ベビーキャリア」など様々な呼称があるが、統一されていない。そこで、ここでは「補助具」と表記した。さらに、おんぶ及びだっこ補助具の様式については調査対象者のすべてが理解できるものではないと考え、先行研究³⁾を参考に、イラストを表示することで補足した。このイラストを表1及び表2に示す。

表1 おんぶ補助具の様式



表2 だっこ補助具の様式



(2) 検定方法

Excel 2010 を用い、分割表による χ^2 検定を行った。

3. 結果

(1) 調査対象者の属性

1) 性別

図1に調査対象者115名（男性36名、女性79名）の性別割合を示す。平均年齢は19.8歳であった。

2) 出身地

図2に調査対象者115名の出身地割合を示す。なお、各地区は愛知県の「市区町村別推計人口と世帯数」⁴⁾を参考に割り振りをした。表3に地区の割り振りの内訳を示す。この結果、西三河地区が最も多く38%、次いで愛知県外が24%、東三河地区が14%となった。

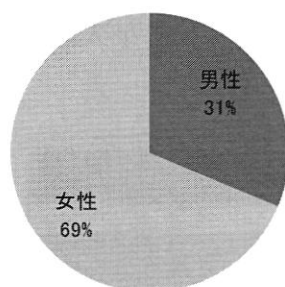


図1 性別

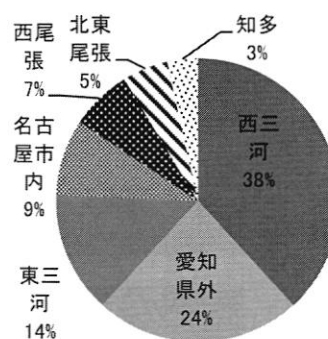


図2 出身地

表3 地区の割り振り

地区名	該当する市
西尾張	一宮市、津島市、稲沢市、愛西市など
北東尾張	瀬戸市、春日井市、犬山市、江南市、小牧市、尾張旭市、岩倉市、豊明市、日進市、清州市など
名古屋市内	名古屋市
知多	半田市、常滑市、東海市、大府市、知多市など
西三河	岡崎市、碧南市、刈谷市、豊田市、安城市、西尾市、知立市、高浜市など
東三河	豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市など

(2) 幼い頃のおんぶ及びだっこについて

1) おんぶ又はだっこをされた記憶の有無

「幼い頃におんぶ又はだっこをされた記憶の有無」を尋ねた。図3に結果を示す。おんぶ、だっこともに約80%が「ある」と答えた。

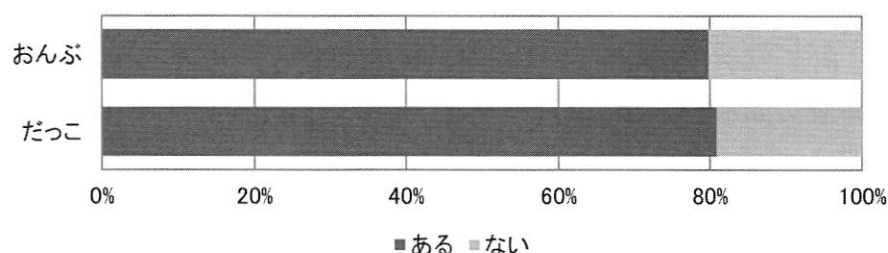


図3 幼い頃におんぶ又はだっこをされた記憶の有無

2) おんぶ又はだっこをしてくれた人物

「主におんぶ又はだっこをしてくれたのは誰だったと思うか」を尋ねた。図4に結果を示す。おんぶをしてくれた主な人物として「母親」が38%、「父親」が36%、「祖母」が16%であった。おんぶは「母親」以外の人物によって行われた印象をもっていることが示された。これに対し、だっこをしてくれた主な人物として「母親」が71%を占めた。

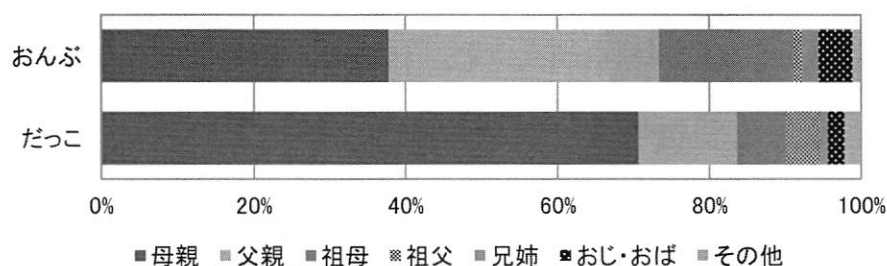


図4 おんぶ又はだっこをしてくれた主な人物

3) おんぶ又はだっこに対する好き嫌い

「おんぶ又はだっこをされるのは好きだったか」を尋ねた。図 5 に結果を示す。おんぶ、だっこともに概ね「多分、好きだったと思う」と答えた一方、「覚えていない」がおんぶでは 19%、だっこでは 23% 挙げられた。「多分、嫌いだったと思う」はいずれも挙げられなかった。

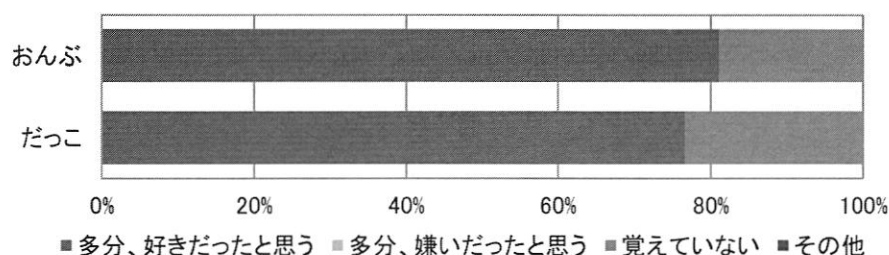


図 5 おんぶ又はだっこされたことに対する好き嫌い

(3) 過去 1～2 年のおんぶ及びだっこを目にした経験について

1) おんぶ又はだっこを目にした経験

「過去 1～2 年におんぶ又はだっこをしている場面を見たことがあるか」を尋ねた。図 6 に結果を示す。過去 1～2 年におんぶを目にした経験のある者は 51% であったのに対し、だっこを目にした経験のある者は 89% であった。 χ^2 検定の結果、有意差が認められた ($p < .001$)。このことから、おんぶを目にした経験とだっこを目にした経験には差があるといえる。

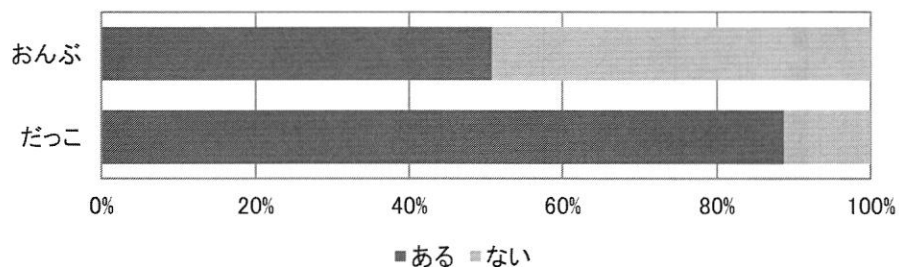


図 6 過去 1～2 年でおんぶ又はだっこをしている場面を見た経験

2) おんぶ又はだっこを目にした場所

「おんぶ又はだっこを目にした場所はどこだったか」を尋ねた。図 7 に結果を示す。だっこ、おんぶの違いに関わらず、「スーパー等の商業施設」、「公園など」、「電車などの公共交通機関」が多く挙げられた。

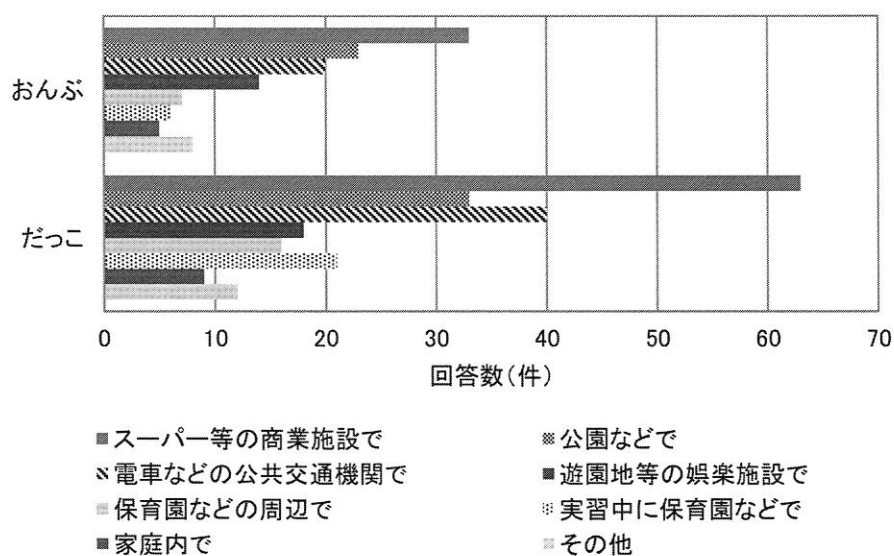


図7 おんぶ又はだっこを目にした場所（複数回答）

3) おんぶ又はだっこをしていた人物

「おんぶ又はだっこをしていたのは誰だったと思うか」を訪ねた。図8に結果を示す。おんぶ、だっこの違いに関わらず、「母親」が最も多く、次いで「父親」、「祖母」の順に挙げられた。

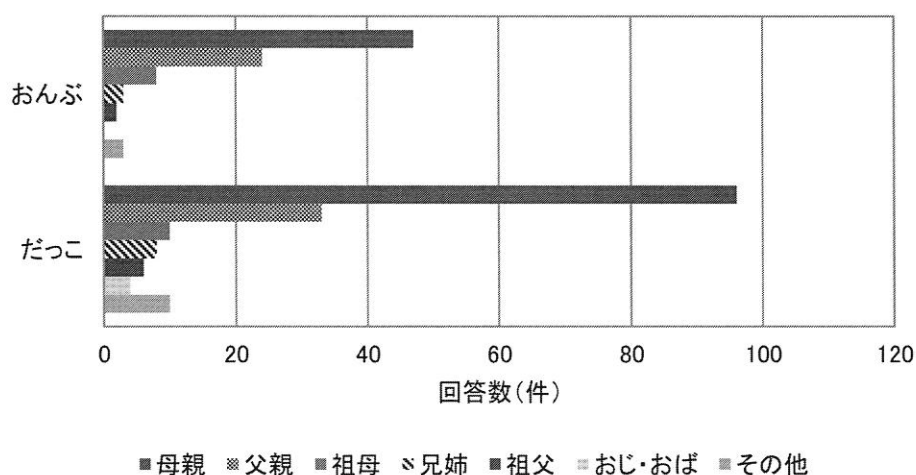


図8 おんぶ又はだっこをしていた人物（複数回答）

4) おんぶ又はだっこの様式

「どのような様式のおんぶ又はだっこを目にしたか」を尋ねた。図9におんぶの様式の結果を、図10にだっこの様式の結果を示す。おんぶでは「補助具（ベビーカー）を使ったおんぶ」、「素手によるおんぶ」が多く、だっこでは「素手による縦だっこ」、「補助具を使った対面縦だっこ」が多く挙げられた。

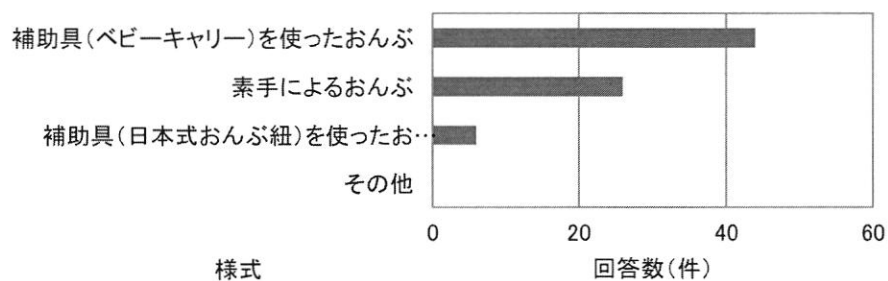


図9 目にしたおんぶの様式（複数回答）

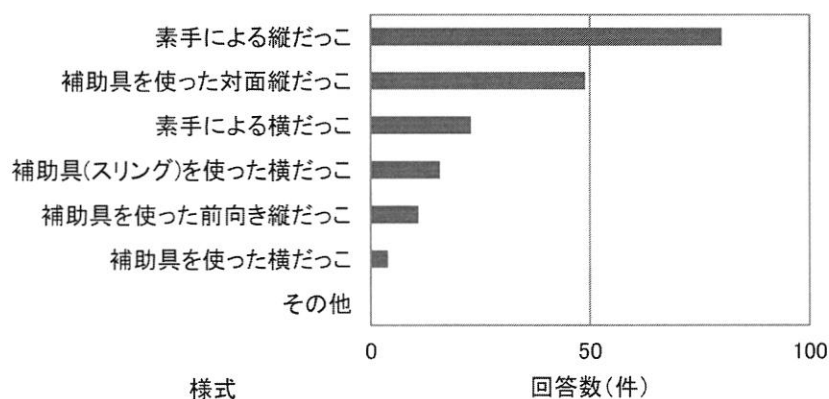


図10 目にしただっこの様式（複数回答）

(4) 過去1～2年のおんぶ及びだっこに関する経験について

1) おんぶ又はだっこをした経験

「過去1～2年のおんぶ又はだっこをした経験」を尋ねた。図11に結果を示す。この結果、おんぶは22%が、だっこは54%が「ある」と答えた。 χ^2 検定の結果、有意差が認められた ($p < .001$)。このことから、おんぶ又はだっこでは過去1～2年の経験に差があるといえる。

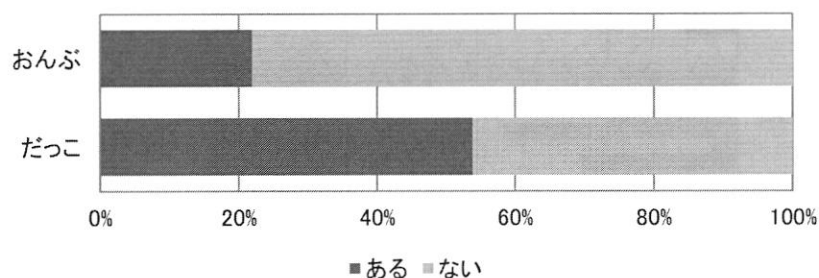


図11 過去1～2年におんぶ又はだっこをした経験

2) おんぶ又はだっこをした相手

「過去1～2年のおんぶ又はだっこをした経験」が「ある」と答えた者に「誰をおんぶ又はだっこしたか」を尋ねた。図12に結果を示す。おんぶでは「実習中に関わった園児」が最も多く、次いで「親戚のこども」、「友人のこども」の順となった。だっこでは「親戚のこども」が最も多く、「実習中に関わった園児」、「友人のこども」の順となった。

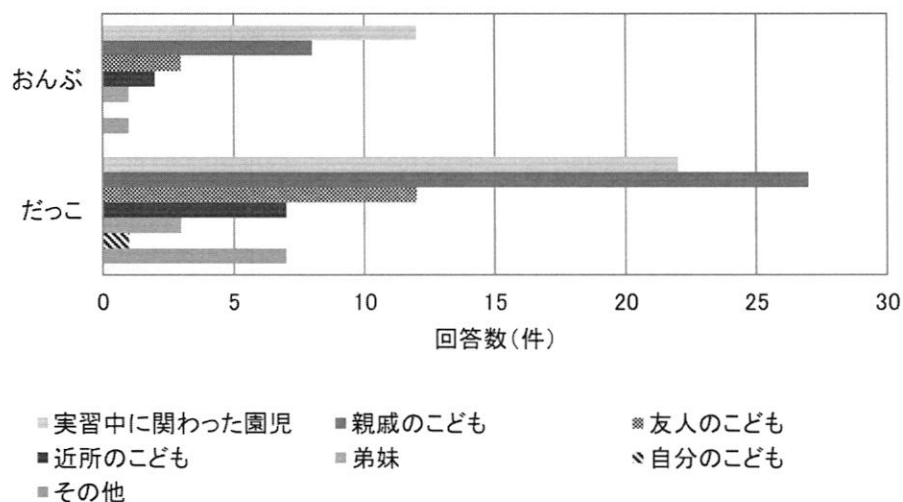


図12 おんぶ又はだっこをした相手（複数回答）

3) おんぶ又はだっこをした場所

「どこでおんぶ・だっこをしたか」を尋ねた。図13に結果を示す。おんぶでは「実習中に保育園などで」が最も多く、次いで「家庭内で」、「公園などで」の順となった。だっこでは「家庭内で」が最も多く、次いで「実習中に保育園などで」、「公園などで」の順となった。

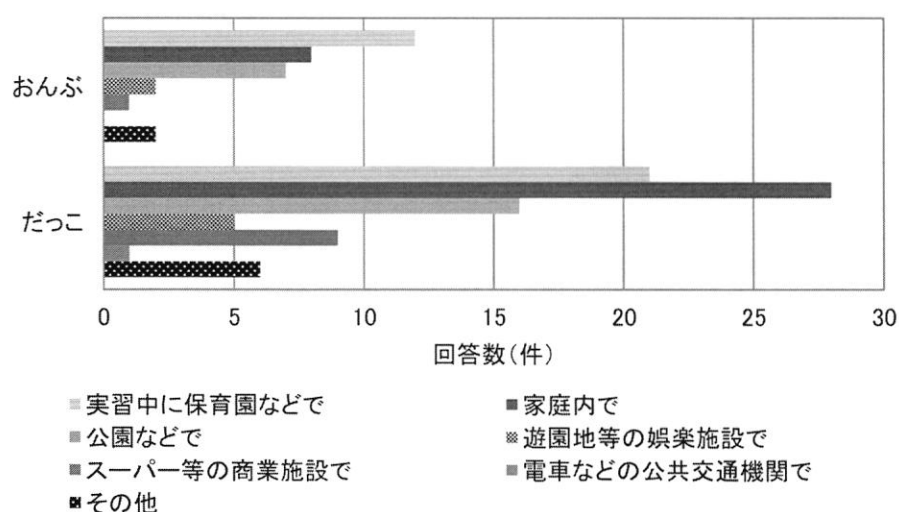


図13 おんぶ又はだっこをした場所（複数回答）

4) おんぶ又はだっこの様式

「どのようなおんぶ又はだっこをしたか」を尋ねた。図 14 におんぶの様式の結果を、図 13 にだっこの様式の結果を示す。おんぶでは「素手によるおんぶ」が多く挙げられた一方、「補助具（ベビーキャリア）を使ったおんぶ」は全く見られていなかった。だっこでは「素手による縦だっこ」が非常に多く挙げられたが、「補助具を使った前向き縦だっこ」と「補助具（スリング）を使った横だっこ」は全く見られていなかった。

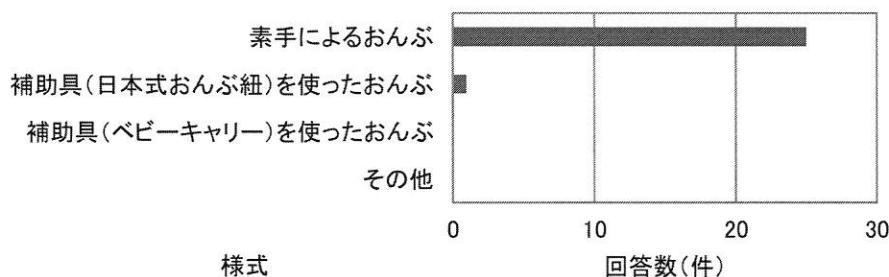


図 14 おんぶの様式（複数回答）

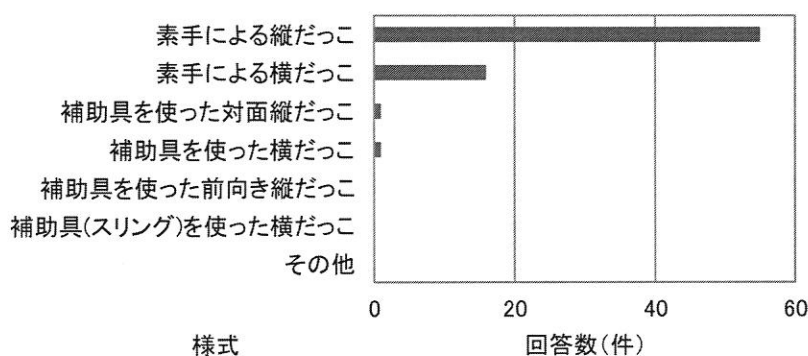


図 15 だっこの様式（複数回答）

(5) おんぶ及びだっこに対する考え方と将来の子育てについて

1) おんぶ又はだっこに対する考え方

「おんぶ又はだっこをどのような方法だと考えているか」について尋ねた。図 16 に結果を示す。おんぶでは「スキンシップがとれる方法」、「安心な方法」、「便利な方法」などが挙げられた。だっこでは「スキンシップがとれる方法」、「安心な方法」に加えて「安全な方法」と考えられていることがわかった。

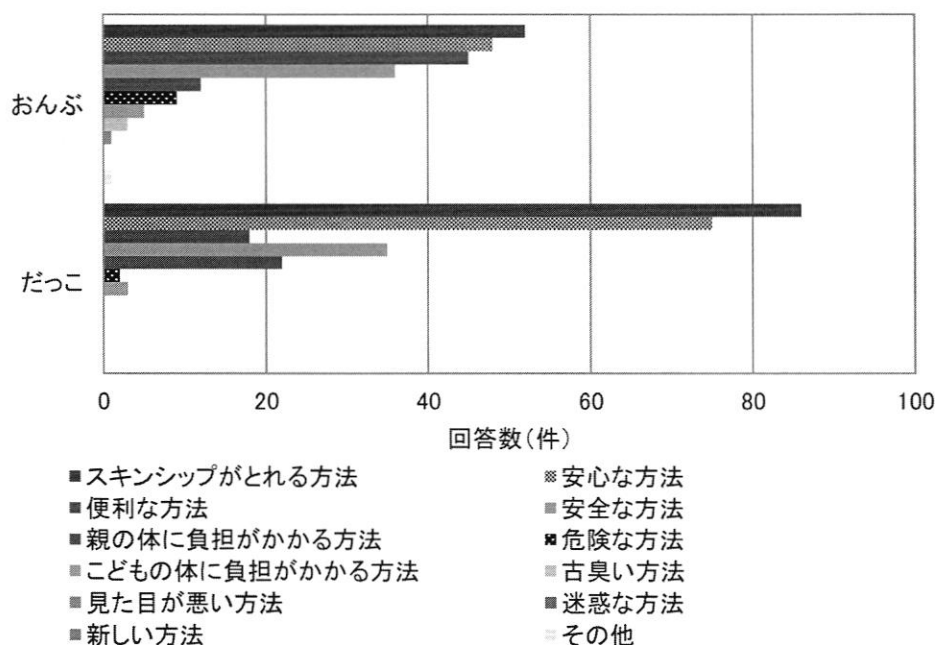


図 16 おんぶ又はだっこに対する考え方 (複数回答)

2) 自分の子育てに関するおんぶ又はだっこに対する考え方

「自分が子育てををするとしたら、おんぶ又はだっこを取り入れるか」について尋ねた。図 17 に結果を示す。将来の自分の子育てに、86%がおんぶを取り入れると考えており、98%がだっこを取り入れると考えていたことから、将来の子育てにはおんぶ、だっことも取り入れたいと考えていることがわかった。 χ^2 検定の結果、有意差が認められた ($p < .001$)。このことから、おんぶとだっこでは自分の子育てに取り入れるか否かに差があるといえる。

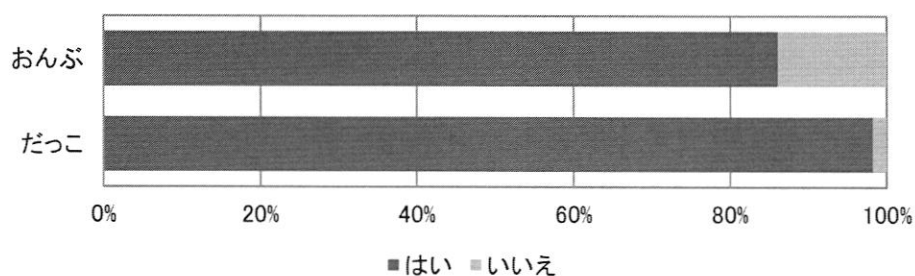


図 17 自分の子育てにおんぶ又はだっこを取り入れるか

3) 自分の子育てにおんぶを取り入れない理由

(5) 2) において、自分の子育てにおんぶを取り入れることに「いいえ」と答えた者にその理由を尋ねた。図 18 に結果を示す。「危険だから」が最も多く挙げられた。

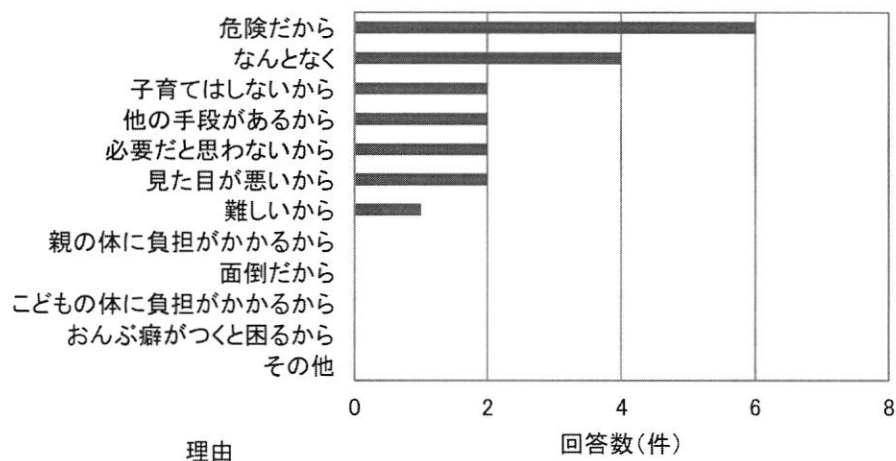


図 18 おんぶを取り入れない理由（複数回答）

4) 自分の子育てに関するおんぶ又はだっこの利用

自分の子育てにおんぶ又はだっこを「取り入れる」と答えた者に「自分の子育てに利用したいおんぶ又はだっこの様式」について、家庭内と外出時に分けて尋ねた。図 19 に利用したいおんぶの結果を、図 20 に利用したいだっこの結果を示す。

おんぶの場合、家庭内では「素手によるおんぶ」が多挙げられ、外出時は「補助具（ベビーキャリー）を使ったおんぶ（43%）」や「素手によるおんぶ（42%）」が多く挙げられた。「補助具（日本式おんぶ紐）を使ったおんぶ」は 6% と少なかった。だっこの場合、家庭内では「素手による縦だっこ」、外出時は「素手による縦だっこ」や「補助具を用いた対面縦だっこ」が挙げられた。

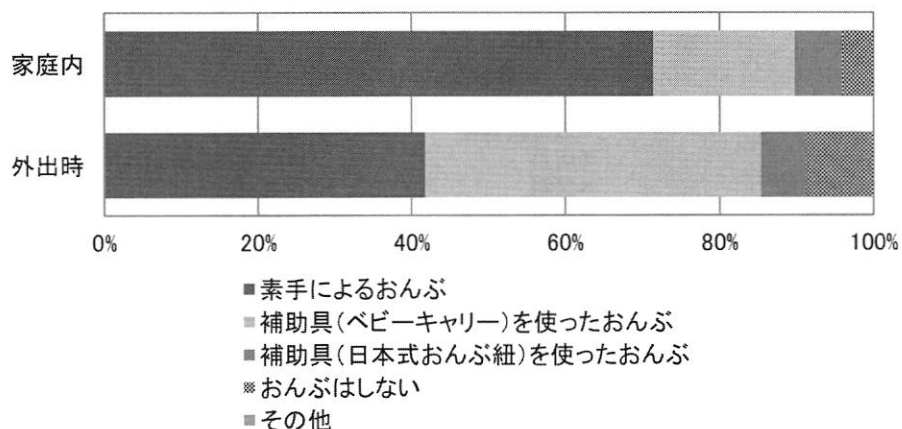


図 19 自分の子育てに利用したいおんぶの様式

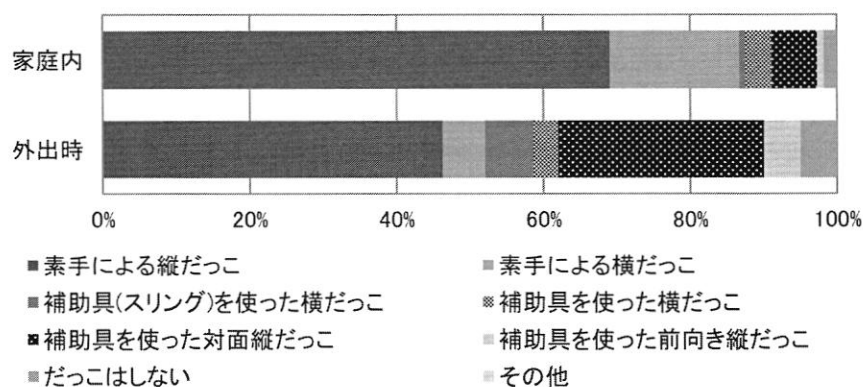


図 20 自分の子育てに利用したいだっこ

5) おんぶ又はだっこ補助具の使い方を教えてもらおうと思う人物

「おんぶ又はだっこ補助具の使い方を教わるとしたら、誰に教わるか」を尋ねた。

図 21 に結果を示す。おんぶ、だっこに関わらず、圧倒的に「母親」が多く挙げられた。

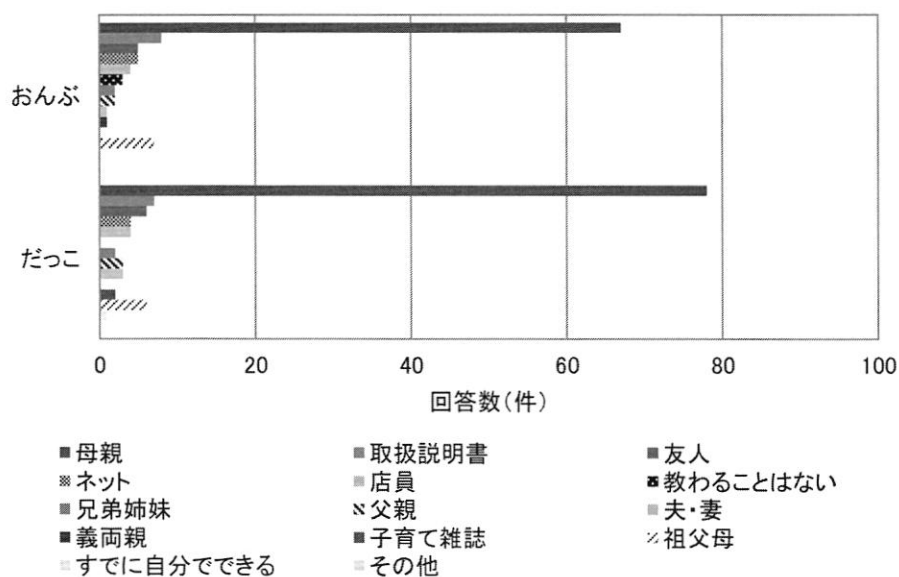


図 21 おんぶ又はだっこ補助具の使い方を教えてもらおうと思う人物

4. おわりに

子守帯を用いたおんぶを家庭科教育の体験的学習の教材として開発することを目的とし、ここでは、将来の子育て世代となる大学生を対象におんぶ及びだっこに関する経験などについてのアンケート調査から、その必要性について検討を行った。

その結果、大学生には概ね自分自身がおんぶをしてもらった記憶があり、自分の子育てにもおんぶを取り入れたいと考えていることがわかった。その一方で、おんぶを目にする機会もおんぶをする機会にも恵まれていなかった。運よくおんぶをす

る機会に恵まれた者であっても「実習中に関わった園児」を相手にしていることが多かったことから、学校教育でその場を提供しなければおんぶをする機会はなかったことが示唆された。また、大学生は家庭内で「素手によるおんぶ」を利用したいと考えていることもわかった。しかしながら、「素手によるおんぶ」は子ども自身が自分の手足でしっかりとつかまることができることが条件となる。自分自身の手足でつかまえる力を十分に備えていない乳児を、負ぶう人の腕だけで支え続けるのは困難であろう。子育ての場面では泣き止まない乳児をあやしながら家事をする場面がよく見かけられることから、家庭内でのおんぶとして子守帯を用いたおんぶを教える必要があると考えられた。特に「日本式おんぶ紐を使ったおんぶ」は乳児と負ぶう人とは密着する度合いが高いと考えられるとともに、乳児と負ぶう人はほぼ同じ視点で周囲を眺めることができるため、乳児に家庭内での出来事や社会に関心をもたせやすいと思われる点から有意義であると推察された。さらに、多くの大学生は「母親」に補助具の使い方を教えてもらおうと考えていることがわかった。もちろん、大学生自身の「母親」に教えてもらうことができれば問題はないだろう。しかしながら、居住地間の距離や親子関係の問題などから、子育てを「母親」がいる環境で行えるとは限らない。また、晩婚化によって「母親」世代の子育て期間とは時間的な隔たりが大きくなっていることから、補助具の様式が変化していることも考えられ、「母親」の経験に頼ることができるかどうかは未知数である。

これらのことから、将来、子育てに取り組むであろう世代には、子育てに直面する前に、保育領域を担う家庭科教育の中で子守帯を使ったおんぶを教えていく必要があると考えられた。

謝辞

アンケート調査にご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1)『高等学校学習指導要領解説 家庭編』開隆堂出版（平成 22 年）p.12
- 2)『高等学校学習指導要領解説 家庭編』開隆堂出版（平成 22 年）p.84
- 3) 倉内淳子、佐藤咲子、平元泉「用途別の子守帯を使用した「抱っこ・おんぶ」の学内演習の効果」看護教育 37（2006）p.227
- 4)「市区町村別推計人口と世帯数」

<http://pref.aichi.jp/toukei/jyoho/tokushu.html#jinkou>